

新潟清酒 「にいがた酒の陣」で消費喚起

全国、県内とも減少が続く清酒の出荷量

清酒の出荷量は、嗜好の多様化や若者の日本酒離れ、高齢化による需要の縮小などを背景に減少傾向を辿っている。

全国の出荷量は、平成5年以降、18年連続で減少している。一方、県内の出荷量は、地酒ブームで出荷が伸びた平成8年に直近のピークをつけた以後、14年連続で減少している。

清酒の出荷量は、平成元年を100とすると、平成22年は全国が42.7、県内が69.3となり、26ポイント以上の開きがある。県内の出荷量も減少しているものの、全国と比べると落ち込み幅は少なく、健闘しているといえる。

この背景には、県内の酒蔵は、出荷に占める「特定名称酒」（吟醸酒・純米酒・本醸造酒など）の割合が64%程度と、全国（26%程度）に比べて高いことがある。全国、県内とも出荷量の落ち込み幅は、「特定名称酒」よりも普通酒の方が大きく、品質の高い「特定名称酒」主体の県内は、その分、出荷量の落ち込みが緩和されているといえる。

「にいがた酒の陣」で新潟清酒をアピール

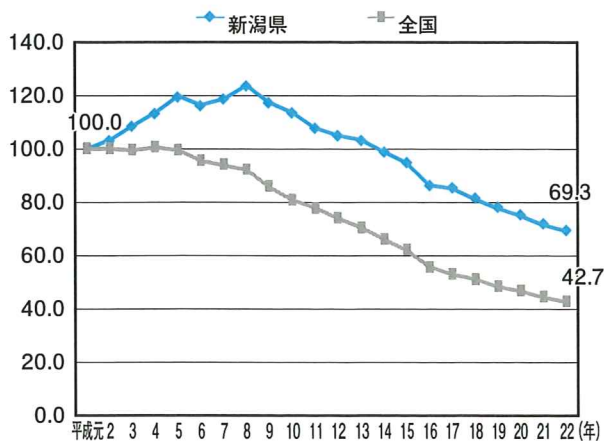
県内の酒蔵は、落ち込みが続く出荷量に歯止めをかけるべく、平成16年から「にいがた酒の陣」を開催して、消費者へのアピールに努めている。

「にいがた酒の陣」では、県内の酒蔵が一堂に会し、各酒蔵の提供する500種類にも及ぶ地酒を試飲することができる。このため、回を重ねるごとに、全国から日本酒の愛好家が集まるようになり、平成22年には、2日間で87,000人も集客となった。

昨年は、東日本大震災の影響で中止となったため、2年ぶりの開催となる今年（3月17日・18日）は、過去最高の9万人を超える来場者数が見込まれている。

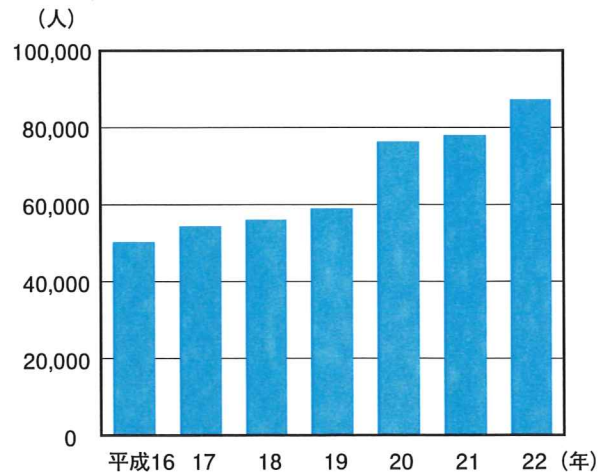
今年の「にいがた酒の陣」では、新成人にターゲットを当て、一般の当日券が2,000円のところ、新成人は500円で地酒を試飲できるようにしている。県内の大学にポスターで告示するなどして来場を呼びかけ、新たな日本酒ファンの掘り起こしを狙っている。

清酒の出荷状況の推移（平成元年＝100）



資料：新潟県酒造組合

「にいがた酒の陣」来場者数の推移



平成23年は東日本大震災のため中止

資料：新潟県酒造組合